

日本ブロンテ協会関西支部
2017年大会プログラム

場 所： 大阪電気通信大学 駅前キャンパス 502教室
（〒572-0837 大阪府寝屋川市早子町12-16
京阪本線「寝屋川市」駅下車 徒歩約3分）
[急行(快速急行)停車駅]

日 時： 2017年3月29日(水)14:00～19:30

司 会： 後中 陽子(神戸親和女子大学講師)

開会の辞： 服部 慶子(日本ブロンテ協会関西支部支部長・大阪大谷大学教授)

会長挨拶： 白井 義昭(立正大学教授)

会場校挨拶： 福田 共和(大阪電気通信大学副学長)

研究発表：(14:10～15:10)

『シャーリー』における小説の中のもう一つの空間

古野 百合(三重県立津商業高等学校教諭)

『嵐が丘』における悲嘆

山内 理恵(神戸市看護大学准教授)

講 演：(15:30～16:30)

『ジェイン・エア』と『螺旋の回転』

—ヘンリー・ジェイムズの「一ひねり」—

惣谷 美智子(神戸海星女子学院大学教授)

談 話 会：(16:40～17:10)

総 会：(17:10～17:20)

閉会の辞： 内田 能嗣(日本ブロンテ協会顧問・帝塚山学院大学名誉教授)

懇親会：(17:30～19:30)

場所： 大阪電気通信大学 駅前キャンパス 207教室

会 費： 5,000円

日本ブロンテ協会関西支部事務局

〒530-0055 大阪市北区野崎町1-25 新大和ビル3F 大阪教育図書株式会社内

TEL: 06-6361-5936(代) bronte.kansai@gmail.com

研究発表

1. 『シャーリー』における小説の中のもう一つの空間

古野 百合(三重県立津商業高等学校教諭)

シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë, 1816-1855)の『シャーリー』(*Shirley*, 1849)において、語り手は大きく分けて二度にわたり、シャーリーの元家庭教師ルイ・ムーアが日記を書くシーンを、読者と共に肩越しに見るかのように読むという形で登場させる。キャロル・ボック(Carol Bock)が指摘するように、本作品には仮想の語り手“implied narrator”と仮想の読者“implied reader”との融合と衝突がテーマであるという見方があり、「語り手と共に登場人物の日記を読む」という特権を、読者は与えられる。全知全能なる語り手に導かれ、登場人物より優位に立つ特権に預かることのできる優越感を生み、また語り手と読者の間に生まれる一体感や連帯感を生むという役割を、日記が果たしていると言えよう。最終章を除いた物語の本編がこのルイ・ムーアの日記で閉じられていることが意味するのは、一体何なのか？ 語り手による介入がもたらす小説の中のもう一つの空間、“annex”(Suzanne Keen)について考察し、検証してみたい。

2. 『嵐が丘』における悲嘆

山内 理恵(神戸市看護大学准教授)

本発表では、『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)の中で登場人物たちが示す悲嘆の様子に焦点を当てる。医療領域から発信された「悲嘆のプロセス」に関する研究を使い、エミリー・ブロンテ(Emily Brontë, 1818-1848)が作品で描く悲嘆が現代の医療で研究されている悲嘆に一致することを確認する。そして、それぞれの登場人物の悲嘆の様子を分析し、それらが彼らの精神状態を映し出すことを論じる。

『嵐が丘』では複数の登場人物の死と周囲の悲嘆が描かれる。作家は自分の体験と知識を手掛かりに作品を作り上げるため、作品に描かれる悲嘆は、ブロンテ自身の死別と悲嘆の体験の他、他者の悲嘆の観察や読書などによって彼女が得た知識に基づくと言える。ブロンテによる悲嘆の描写の正確さは、彼女がいかに人間の悲嘆の本質を捉えていたかを証明し、作品としての『嵐が丘』の質の高さを表す。